

う。静かに過去を振り返ると、北支での戦闘、満州での猛訓練、広島での原爆、大阪での大空襲、いずれも間一髪の差で戦死をまぬかれた。これも「亀」に縁があったお陰だったのだろうか。迷信といえればそれまでだが、そんな気がしてならない。終戦後三度も職に復帰し、十五歳で就職した私鉄と通算四十二年七カ月を勤続して定年退職、その後は大川市選挙管理委員、同社会教育委員、文化センター運営委員、行政区長、公民館長代表者会長、その他諸々の役職を経て退任、その間常に軍人精神の長所を活かして己を厳しく律して、現在余生を送っております。

大空襲下の台湾防衛

戦後母と共に沖縄に帰郷

沖縄県 島袋 永進

私は昭和十六年、那覇商業学校卒業後、台湾総督府交通局鉄道部（従業員数全島四万人）に就職しました。

昭和十八年徴兵検査を受け、同年十二月に現役兵として台湾第三部隊（旧台湾歩兵第一連隊）第一中隊に入営しました。連隊は台北市内にありました。

歩兵連隊で一般中隊でありましたが、教育途中より通信暗号手としての訓練も加わりました。教育期間の私的制裁の厳しさは、台湾部隊も同じように毎日繰り返されて辛い日々が続きました。幹部候補に採用され、乙種幹候となりました。

教育期間が終了するころ、部隊はチモール島派遣の下令に従い出動しましたが、派遣途中、戦局が悪化し、レイテ島作戦の打ち切りにより南方派遣命令も中断され、急遽、台湾東部海岸花連港付近への敵軍の上陸に備え、同地区の配備につくことに変更となりました。このために、チモール島への輸送途中の海難を免れたのでした。

終日低い雲に覆われている花連港の米倫山（標高二千メートルくらいか）の中腹部に、我々の拠点である堅固な坑道陣地を作るため、必死の連日連夜の強行作業が続けられました。

当時は台湾を縦断する険阻な大山脈を東西に横断する鉄道がまだ未完の時であり、花蓮港地区に対する補給路は、乏しい海上輸送に依存するに外なく、工用資材、兵員の食糧などの補給も不自由な中での難工事でありましたが、台湾防衛の成否に関する問題であり、死力を尽くしての工事が進められました。

この工事に現地人、特に蕃社の人々の協力がありました。彼らは非常に日本化されており、在来島民より日本語も標準語を使い、協力的であり、特に健脚で、視力も我々よりも遥かに優れていて、物資不足の時期、山羊、栗など現地自活に協力して働いてくれたことは有り難かったです。

台湾は昭和二十年五月三十一日、B 29、B 24に加えて近海の機動部隊からの多数の艦載機の戦爆連合の大空襲に見舞われました。

この空襲により台湾の全地区は大被害を被りました。特に兵舎などに使用した学校などは、あらかじめ島民のスパイ通報の故か、大小漏らすことなく空爆の対象となり、破壊され尽くしたのでした。

私の留守家族は、台湾の人々から「日本は敗けるよ、日本人は皆殺しになるよ」と注意を受けていたので、妹を沖縄の家に疎開させていましたが、沖縄も前後して空襲のため家も焼けてしまったのでした。台北の家には母が住居していましたが、この空襲で焼失しました。

昭和二十年八月終戦を迎えましたが、私には「鉄道部復帰、台湾留備」が命ぜられました。沖縄玉砕の報を受け、悲惨な郷里沖縄のことをあれこれ心配しての台湾留備の身の切なさを味わいつつ暮らす日々でした。昭和二十一年十二月、「台湾留用」が解除され、母とともに故国沖縄に帰郷しました。二十一年の暮れは故国沖縄は戦後一年四カ月を経過し、米軍一色に塗り替えられ、那覇市内は復興の緒についたばかりの時点で、無の世界からの出発でした。

私は復員後、沖縄民政府用度補給部に職を与えられ、全くの人生への再出発が始まりました。当時、六十万人を数えた県民の中、戦死者二十三万人を算し、残存四

十万弱の県民が辛じて島内に生存者として残留し、県民の全員が米軍に依存して生活を続けていたのです。

年齢別に、カロリー計算を基礎とした配給通帳による受給生活であり、この計算に我々は従前の手廻式タイガー計算機しか知らないのに比べ、米兵が使用する簡単な電気計算機には驚きました。米国の先進文化と物量に圧倒される我々でした。

食糧の配給も十分であり、特に煙草、粉ミルクなどは食いきれないほど豊富な配給を受けての生活でした。

個人住宅の建設も進められ、資材一切の支給が行われ、米松を主とした2×4工法でした。隣保の人々が互いに協力し合って住宅の建築が徐々に進みました。

長い二十八年にわたる米軍占領支配の年月を経過して、昭和四十七年、再び待望の故国日本に復帰の念願が達せられたのです。

私は沖縄民政府から身分が農林省補給庁へと移転し、さらに民間の食糧会社へと移り、定年まで勤めました。

台湾へ同行した母は、私と共に沖縄へ帰郷し同居していましたが、三十三年前に世を去りました。

私には三人の子があり、三人共に薬剤師として教育しましたので、子供たちの業を活かすこととし、市内久米地区内で薬局を開業し、今日に至りました。

戦災のため那覇と台北で二度も家を焼かれましたが、沖縄島民の中には家族全滅の哀れな家庭もある中で、労苦に満ちた人生ではありましたが、比較的恵まれた人生であったと感謝の念で暮らしている今日であります。

幸運の転属・転進

満州郭亮山の戦を憶う

埼玉県 飯野 又二

埼玉県大里郡岡部町で大正十二年五月五日、自作農の次男として生まれました。高等小学校を卒業する前から農作業の手伝いをしていましたが、支那事変が始まり、出征兵士を駅頭で送ったり、南京陥落などの提灯行列にも参加しました。小学校を卒業するころから